



## 八期歴史会往来第47号

2021年3月1～3月31日

東北大〈地震・津波・原発〉災害10年メモリアル号

●歴史通信担当 大石より。

日本列島、桜満開です！！

依然として、コロナも日本列島隅々まではびこっていますが、さすがに1年も経つとマンネリ??感があり、ワクチンを待ちつつも怖さは薄れ気味ではないでしょうか?危ない、危ない!!

管理人も事務所が支度に換わりパソコンの前に座る時間が不定期になりました。

八期仲間との『情報交換』もこの頃は SNS (スマホを媒体とする LINE や Facebook そしてユーチューブ) が本当に中心になりつつあります。

現在、LINE も3つの八期グループが管理人の大石のもとに活動しています。

メインの玉龍八期会には会員33名うち27名ほどの仲間の皆さんがトーク画面を見てもらっています。特に、待望久しかった会長の浜崎 隆さんがメンバーに加入してからトーク面の意見交換が活発になっています。和らかなジョークの遣り取りから、真面目な情報まで、男女入り乱れ(乱れと言っても誤解しないように・・・)かごしま弁や英語混じりでたのしい会話が飛び交います。

みんな八期と言っても知らない人に見られるのはいや!!というお嬢様方の為に『仲よし八期ロックンローラー』9名のLINE 会もあれば、鹿児島在住の歴史小旅行の連絡会6名参加の『八期歴史たび会』もあります。一方、パソコンを媒体とした(今までメインの)Eメールでの意見交換の広場『今書いている、八期歴史会往来も早いもので第47号(4年目)を迎えます。

こちらは、SNS とは違い文章がメインの交流広場です。社会・歴史・経済・文化と色とりどりで、MC といつかメインのコメンテーターに自然に東京の西山和宏さんや、大阪、生駒の木場 祥雄くんがいつも意見を述べてくれています。歴史問題(もとはと言えばこれがメインで始まったのですが・・・)は隈元達雄くんが解説してくれます。ただ何といても40名近い八期仲間にメール発信していますが反応(返信)がないのが SNS と比べて残念です。

○3月2日大石 慶二 様

永吉・坊野、探査の4名の方々、3月12日の件、承りました。

一応、一日の行程で考えていますが、細かい行程はおまかせください。

天気の様子が気になりますが、当日の昼食を予約する必要があり、

雨天程度であれば、「決行」ということで、お願いします。



2021, 3, 2,

本田 哲郎

○大石コメント

了解しました。

体調万全でないのに面倒おかけします。

よろしく願い申し上げます。 大石

○隈元コメント

転送ありがとうございます。あとは天気を祈るのみですね。

○西山コメント

都心でのヘリコプターのタッチアンドゴー訓練は、都心でのクーデター制圧を想定してのものでしょうか。むしろ、都心部駐屯のヘリ部隊によるクーデターの方が脅威です。

西山 和宏



米軍ヘリ、六本木でタッチ・アンド・ゴー 密集地を低空で旋回東京・六本木の米軍ヘリポートに着陸し、30秒後に2回目の離陸をする米海軍ヘリ「シーホーク」=東京都内で2020年8月21日午後0時55分、

弘行撮影(写真は動画か) 在日米軍ヘリが首都・東京の中心部で日本のヘリであれば違法となる低空飛行を繰り返している問題で、米海軍ヘリ「シーホーク」が渋谷駅や六本木ヒルズ周辺を低空で旋回するなどした後、六本木の米軍ヘリポートに着陸し、わずか数十秒後に離陸する様子を毎日新聞が確認した。専門家は「タッチ・アンド・ゴー」と呼ばれる離着陸訓練と指摘している。離着陸を5回繰り返したこともあり、人口密集地で事故の危険性がある訓練が行われている。

毎日新聞は昨年7月から約半年かけて都心を一望できる高さ200メートル級の複数地点から調査する中で、こうした飛行を確認した。

シーホークは昨年8月21日午後0時45分ごろ、神奈川方面から渋谷駅周辺を經由して六本木のヘリポートに着陸。6分後に飛び立ち、約2キロ離れた渋谷駅上空で旋回した。その際の高度は駅直結の商業ビル「渋谷スクランブルスクエア」(高さ約230メートル)を下回り、このビルを軸に円を描

3 総合 2021年(令和3年)2月17日 水曜日

# 米軍訓練増加「合理的」

## 河野前統幕長 地元理解が前提

自衛隊制組トップ 南日本新聞のインタビューに応じ、河野克俊前統幕長は、米軍の訓練増加について「合理的」と述べ、地元理解が前提だと強調した。河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。

河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。

# 日本の役割強化必要

## 米軍の運用を支える

河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。

河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。河野氏は、米軍の訓練は、自衛隊の戦力向上に貢献しているとし、地元住民への説明も重要だと述べた。

くように六本木方面にUターンした。再び六本木のヘリポートに低空で接近して着陸すると、今度はわずか30秒で飛び立ち、渋谷スクランブルスクエアの横を通過して神奈川方面に飛び去った。

「米軍ヘリはなぜ東京上空で異常飛行を繰り返すのか？」

在日米軍所属のヘリコプターが首都・東京の中心部で、日本のヘリであれば違法となる低空飛行を繰り返している実態が毎日新聞の取材で明らかになりました。また、米海軍ヘリ「シーホーク」が渋谷駅や六本木ヒルズ周辺を低空で旋回するなどした後、六本木の米軍ヘリポートに着陸し、わずか数十秒後に離陸する様子も確認。専門家は「タッチ・アンド・ゴー」と呼ばれる離着陸訓練と指摘しています。首都中心部で常態化する危険と隣り合わせの飛行。

#### 西山コメント

○東京・六本木の米軍ヘリポートに2回目の着陸をした後、わずか30秒で離陸して南青山エリアを低空で通過する米海軍ヘリ「シーホーク」。後方に見えるのは六本木ヒルズ＝東京都港区南青山で2020年8月21日午後0時55分、加藤隆寛撮影（写真は動画から）

在日米軍ヘリが首都・東京の中心部で日本のヘリであれば違法となる低空飛行を繰り返している問題で、米海軍ヘリ「シーホーク」が渋谷駅や六本木ヒルズ周辺を低空で旋回するなどした後、六本木の米軍ヘリポートに着陸し、わずか数十秒後に離陸する様子を毎日新聞が確認した。専門家は「タッチ・アンド・ゴー」と呼ばれる離着陸訓練と指摘している。離着陸を5回繰り返したこともあり、人口密集地で事故の危険性がある訓練が行われている。

毎日新聞は昨年7月から約半年かけて都心を一望できる高さ200メートル級の複数地点から調査する中で、こうした飛行を確認した。

#### 首相「ルール守って安全面配慮が重要」 米軍ヘリ低空飛行問題



毎日新聞 2021/3/2

在日米軍ヘリが首都・東京の中心部で日本のヘリであれば違法となる低空飛行を繰り返している問題で、菅義偉首相は2日の衆院予算委で「米軍機の飛行はルールを守って安全面に最大限配慮することが重要だ」と述べた。岸信夫防衛相は米側に事実関係を確認していることを明らかにした。

この問題は毎日新聞が米軍ヘリが航空法令上の最低安全高度（人口密集地で300メートル）以下の飛行を繰り返している実態を証拠動画とともに報じた。宮本徹議員（共産）が報道内容に基づき政府見解をたじた。

#### 米海軍ヘリ「シーホーク」 渋谷駅、東京タワー周辺で低空飛行

毎日新聞 2021/2/26

東京・渋谷駅前の渋谷センター街上空を、日本のヘリであれば航空法違反にあたる低空で通過する米海軍ヘリ「シーホーク」（写真右上）。ヘリの奥側にある黒いビルは高さ約111メートル。左下には東急百貨店本店が見える＝東京都内で2020年12月17日午前11時35分ごろ、大場弘行撮影（写真は動画から）

在日米軍のヘリコプターが首都・東京で日本のヘリであれば違法となる低空飛行を繰り返している問題で、米海軍ヘリ「シーホーク」が渋谷駅周辺の繁華街や浜松町周辺のオフィス街で低空飛行をしている様子を毎日新聞が計5回確認した。大勢の人が行き交う渋谷センター街近くを低空で通ったり、東京タワー周辺を蛇行したりする飛行もあった。米陸軍ヘリ「ブラックホーク」が新宿上空などで低空飛行する様子も確認されており、都心の広範囲なエリアで危険な飛行が常態化していることが判明した。

<https://mainichi.jp/articles/20210302/k00/00m/040/273000c>

元海将で米国で防衛駐在官も務めた伊藤俊幸・金沢工業大虎ノ門大学院教授

在日米軍所属のヘリコプターが東京・新宿上空で繰り返し低空飛行を繰り返していることが判明した。映像を見た元海将で米国で防衛駐在官も務めた経験がある伊藤俊幸・金沢工業大虎ノ門大学院教授は問題のある飛行と認めて「米国に言うべきことはきちんとするべきだ」と語る。【聞き手・取材班】

在日米陸軍の「ブラックホーク」が都心の人口密集地でこうした飛行を繰り返していることを今回初めて



で知り驚いている。新宿上空での低空飛行訓練を、米軍が日本政府や東京都に事前に連絡せず、許可なく行っているとしたら大問題だ。また日本政府が連絡を受けていながら都民に公表していないのなら…

毎日新聞は昨年7月から都心を一望できる都庁第1本庁舎展望室（新宿区）など高さ200メートル級の複数地点から調査した。

### 米軍ヘリ、低空飛行常態化 新宿上空で動画撮影し確認

東京・新宿駅から約500メートル離れた場所にある「NTTドコモ代々木ビル」（高さ約270メートル）の手前を低空で通過するブラックホーク＝新宿区の都庁第1本庁舎北展望室で2020年8月18日午前11時5分ごろ、加藤隆寛撮影（写真は動画から）

在日米軍所属のヘリコプターが新宿駅（東京都新宿区）周辺の上空で、日本のヘリであれば航空法違反にあたる高度300メートル以下の低空飛行を繰り返している。毎日新聞は昨年7月以降、こうした飛行を12回、その疑いがある飛行を5回確認した。JRと私鉄を合わせた1日の乗降客が世界最多の約350万人に上る新宿駅の真上を地上約200メートルの高さで通過し、周辺のビルをかすめるように飛ぶこともあった。首都の中心部で危険と隣り合わせの飛行が常態化している。

全国の米軍専用施設の約7割が集中する沖縄では米軍戦闘機による低空飛行や騒音の問題が繰り返し起きている。一方、東京の中心部でも港区六本木にある米軍基地「赤坂プレスセンター」のヘリポート周辺で騒音などの問題が指摘されてきた。米軍が実際にどのような飛行をしているのか。実態を明らかにするため、毎日新聞は昨年7月から約半年かけて新宿区にある都庁第1本庁舎展望室など高さ200メートル級の複数地点から飛行状況を調査した。

### 歌舞伎町→上野→浅草 危険飛行の米軍ヘリ、都心で何を？

<https://mainichi.jp/english/articles/20210226/p2a/00m/0na/004000c>

毎日新聞 2021/2/24



ヘリポートの脇に待機していた迷彩服姿の若い男女6人が乗り込むとすぐに離れた。機体は米軍基地のある神奈川県方面（南西側）に向けて飛び立ったものの、渋谷駅周辺 東京・新宿駅の上空で米陸軍ヘリ「ブラックホーク」による危険な低空飛行が常態化している。米軍ヘリは首都のど真ん中で何をしているのか。要人輸送の訓練、の可能性など、専門家からはさまざま 取材班は昨年7月から今年1月まで新宿駅に近い都庁展望室や取材ヘリなどから飛行実態を調査した。

昨年8月18日午前10時55分、新宿駅から約4キロ離れた港区六本木の米軍基地「赤坂プレスセンター」のヘリポートに黒い機体が降り立った。多目的軍用ヘリ「ブラックホーク」だ。機体に「UNITED STATES ARMY(米国陸軍)」の文字が見える。で北に進路を変え、記者が撮影していた新宿方面に向かってきた。一定の高度を保ちながら、代々木駅近くにある「NTTドコモ代々木ビル(ドコモタワー)」と都庁との間を通過して、新宿駅上空を飛んだ。ドコモタワーの先端(高さ約270メートル)より明らかに低い高度だ。日本の法令は人口密集地などでは、ヘリを中心とした半径600メートル内にある建物の上端から300メートルの高さを「最低安全高度」と定めて、それよりも高い場所を飛ばすように規制している。ヘリが通過した都庁とドコモタワーの間は約1.1キロしかなく、このエリアには「JR東日本本社ビル」(同約150メートル)などの高層ビルが建ち並ぶ。日本のヘリであれば確実に違法となる低空飛行だった。

### ○隈元コメント

種子島の馬毛島もこういうことになりかねません。  
造るまではうまいことをいうのが、アメリカや日本政府の常套手段ですからね。 クマモト

### ○森永コメント

配信感謝です。  
アジア なんかきな臭い情勢に なっているのでしょうか。  
平和日本 少しのんびりすぎるのですかね～  
空襲 機銃掃射等 体験者の生き残り 我々世代のみ 気になることです。  
諫早 長崎 森永

### ○3月7日

#### 日本どこで誤り戦争への道を進んだのか？

the Point of No Return(ポイント・オブ・ノー・リターン)

反戦というか、戦争反省というか  
そういう演劇活動を行っている人たちがいるとは思  
ってもいませんでした。 西山 和宏

### ○森コメント

総力戦研究所とは「秋丸機関」のことではないで  
しょうか？



### ○西山コメント

秋丸機関とは初めて聞きました  
当時の欧米とのGDP差は、10対1とか  
20対1とか言われていたそうで  
長期総力戦を戦えないことは  
判っていたそうです。  
功名争い、意地の突っ張り合いで  
始めたような気がします。

### ○

保坂正康さん、奥さんを亡くされてから  
一時、少し元気がありませんでしたが半藤一利さんとの対談などで  
元気を取り戻したようです。



昭和史についてのさらなる執筆期待すること大です。

馬毛島に遺跡、発掘完了まで開発延期

携帯電話について、文句をドシドシ言いましょう。=====西山 和宏

## ○大石コメント 3月8日

入来文書を研究して世界に広めた人として、ぼくは矢吹 晋(ぼくたちと同年)氏を通して知りました。

氏の作品『海を渡ったサムライ・朝河貫一』をいただきでエール大学教授として日本をアメリカに紹介して日露戦争直後に書いた『日本禍機』では日本古代史の大化の改新を分析(研究)し日米開戦と敗戦を予知して日米の執政者(ルーズベルトや鳩山一郎など)に警告文を送った。

実はたまたま昨日保存していた DVD 録画盤を観ていたのも西山さんと森くんのメールに関連するので、物知り博士、西山さんのコメントがもらえたらと思い「横入り」してしまいました。

<https://archives.bs-asahi.co.jp/asakawa/>

## ○ 西山コメント

ルーズベルトは、ハーバードで金子賢太郎と同窓で会ったとか新渡戸稲造の「武士道」に感銘を受け、日本鼻根であったか言われていますが、ポーツマス条約での仲介役を引き受けたのは日本海海戦で勝利した日本の大勝利にしたくない、ロシアの大敗にしたくないという両者の対立・拮抗状態をゆるやかにでも保持するためという説に賛成したいと思います。

ルーズベルトは、ポーツマス条約締結後、さあ今度は米国が日本と戦争する順番だその準備を始めようと言ったと言われていました。

尖閣列島、沖縄返還前は米軍の射爆場として、その使用料を日本側の地主に支払っていましたところが、沖縄返還にあたって、その返還地域を曖昧なままにしました。

その理由は、日本と隣国の間に紛争の種を残すことであったと思います。

李承晩ラインで囲われた竹島、8月15日以降に侵攻された北方領土これらに米国は日本支持の態度を表明しません。

尖閣列島についても日本の領土という表現をしていません。

つい先日、それらしきことを言いましたが、すぐに取り消しました、

BS 朝日放送の中に

「朝河貫一は、1909年名著「日本の禍機」を出版、日本とアメリカはいずれ戦争になると警告しました」と、あります。朝河は、ルーズベルトおよび米国首脳の意図を察したものだと思います。

朝河の警告、予言の通りにその後の日本は歩いていくことになりました。

また、朝河は、祖国・日本の破滅への道を阻止するべく、1941年、日米開戦直前、当時のアメリカ大統領・ルーズベルトからの昭和天皇宛て親書の草案作りに奔走しています。

これは、日本に戦争をするなというメッセージであったでしょう。

米国がどれほど、日本と戦争をしたがっていたかそのために、どのような努力をしたか？

真珠湾攻撃について、ハワイの日本公使館とのやり取りは米国の電報局を介して行われていました。

日本からの日本公使館へのコピーは、ワシントンに送られ暗号解読機で直ちに読まれていました。

ワシントンは、真珠湾攻撃を事前に知っていました。

しかし、日本軍の真珠湾攻撃を邪魔しないようにハワイの米軍司令官、ハズバンド・キンメル海軍大将、ウォルター・ショート陸軍中將に知らせませんでした。

そのため、キンメルやショートは無能な軍人の汚名を着せられその汚名が雪がれたのは近年のことでした。

真珠湾攻撃は、早打ちのガンマンが、弱い相手をいじめて、先に抜かせて打ち殺すそして、農地や牧場を奪う、西部劇でよくあるシーンです。

「幌馬車隊は西へ」、次のターゲットは中国、今度は少し大きいです！

○大石コメント 3月8日

菊池さん！！

お元気ですか？

相変わらず写真撮っていますか？

ぼくも昨年末で天文館におさらばしました。

ご多分に漏れず「暇を持て余しています」町内会などこの辺はありませんので家でパソコンと日中の活動くらいです。

来週は永吉町に黒川洞穴(河口先生関連)に高校仲間と考古学研究で行ってきます。

楠さんと3人で行ったことがいい思い出です。

そうそう、パソコンで Google から『大石ケイジと美千代美容室』を出してみてください。天文館の思い出動画 20 数編 UP しています。

○相変わらず写真撮っていますか？

ぼくも昨年末で天文館におさらばしました。

ご多分に漏れず「暇を持て余しています」町内会などこの辺はありませんので家でパソコンと日中の活動くらいです。

来週は永吉町に黒川洞穴(河口先生関連)に高校仲間と考古学研究で行ってきます。

楠さんと3人で行ったことがいい思い出です。

そうそう、パソコンで Google から『大石ケイジと美千代美容室』を出してみてください。天文館の思い出動画 20 数編 UP しています。

○菊池です。

年賀状で知りました。長い間美容室の経営ご苦労様でした。

写真のほうは、このところ遠出ができないためご無沙汰です。ニッコールクラブで毎年北海道の撮影旅行に参加していたのですが、感染多発地区でもあるし、先生や仲間からのお誘いがあるのですが自重しているところです。もっばら、近場の撮影でお茶を濁し、フェースブックで作品交換をし満足しております。

楠さんも若くして亡くなられ、とてもお元気な方で島の旅行に連れていってもらったり、中国旅行で一緒にいた頃が懐かしく思い出されます。

一日も早く、コロナの終息を願い、神社・お寺等行き当たりばったりで参拝しながら、御朱印を集めたりと今のところ、なんとか足腰の衰えを先延ばしに動き回っているところです。ワクチンの接種が終われば、世情は好転するのでしょうか。静かに待つことでしょうか。お便りが懐かしく、早速動画を開きたと思います。寒さももう少しでしょう。どうぞご自愛ください。 池

○大石コメント

まだまだ人生はこれからです。

又何処かに趣味が合ったら一緒にしましょう。クルマ運転していますか？

そうそう今古代史にも興味があり昨日まで沖縄舞台の『琉球の風』を読み終え今日から井上靖の『額田王』を読み始めました。

話しは飛びますが河口先生が残した縄文土器(壺)など家に残っていませんか？

見てみたいと思って...然るべきところでは飾ってあるのを見ますけど。

いつかチサンが鹿児島島に来たら一緒に甑島に行きたいですね。

○菊池です！！

○尋ねの縄文土器、收藏品とこれに関わる資料一切を鹿児島県埋蔵文化財センターに寄贈し、一部は常設展で見ることが出来ます。

なにしろ膨大な数で、当時の教え子達が10年ぐらいかかるだろうと整理に努めておられます。

車の運転は、写真撮影には欠かせません。天気さえ良ければほとんど毎日走り回っており、甕島の新しい橋是非行ってみたいところです。

### ○3月9日 隈元コメント 永吉歴史ツアー計画

金曜日の天気予報を追いかけてきましたが、相変わらず「曇り一時雨」のままで変わりません。

降水確率こそ先日の80%から70%になりましたが、木曜日にならないと金曜日の一時雨が何時ごろなのかもわかりません。

私は水曜日までに結論を出そうと言っていましたが、考えてみると水曜日になっても上記のように詳細はわかりません。運転をしてくれる森くんの意向が一番だと思いますが。 クマモト

### ○おはよう御座います。

永野は3月11日

病院に予約が入っています

12日があめのばあい、来週ならいつでも ok です

お土産は用意してあります^^

### ○森コメント

少々の雨なら運転には支障ないのですが、現地では歩いて探索する場所が多いから傘をさして回るのもちょっとね。もし延期する場合には来週は天気の良いらしいので火曜日当りがいいですね。本田さんの都合次第ですが。

### ○隈元コメント

森くん提案の16日(火)の予報は晴れ時々曇り、降水確率30%ですが、雨の模様は出ていません。

私は16日、OKです。

皆さんの都合は？ もちろんそのあと本田さんの御都合を聞かないといけません。

これから3時くらいまで外出します。 クマモト

## 2021/3 1 12 つの悔い、生きた10年 娘の笑顔支えに未来歩む

自宅跡付近で、長女、寿奈さん(右)と次女、詩乃ちゃん(手前)を抱き寄せる鈴木春奈さん(2月、福島県浪江町請戸地区)=共同

福島県浪江町出身の看護師、鈴木春奈さん(37)は2つの悔いを抱えて、この10年を生きてきた。東日本大震災の津波から夫の祖父母を救えなかったこと。勤務先の病院の力になれなかったこと。「この悔いは



一生消えない」。けれど、震災後に生まれた2人の娘に支えられ日々を歩んでいる。

2011年3月11日。浪江町請戸地区の自宅で揺れに襲われた。農機具小屋にいた祖父、長寿さん(当時78)に、祖母、頼子さん(同77)と避難するよう促したが「いいから夜勤に行け」と言われた。いったん内陸の実家に車で避難した。

東京電力福島第1原発から4.5キロ、大熊町の双葉病院に電話はつながらない。暗くなり、道を通れるかも分からなかった。朝まで高台にとどまり車中で夜を明かした。翌朝、防護服姿の人々が現れ、間もなく浪江は全町避難となる。病院には行けなかった。

1週間後、原発事故で病院は避難を強いられ、多くの患者が亡くなったことを知る。請戸地区は津波に襲われ、5月に祖父、7月に祖母の遺体を確認した。勤務先に貢献できず、自分は助かり家族が命を落とした。「私、何もできなかった」

仕事を辞め、12年夏に避難先で長女を産んだ。「行け」と言われて助かった私が、命をつなぐ。不思議な感覚だった。祖父から一字もらい寿奈と名付けた。子育ては震災の記憶を和らげた。

13年冬、祖父母の次女に当たるおばに、ようやく謝ることができた。「私が避難させていれば、私のせいで…。」恨まれていると思っていた。「そんなに責めなくていいよ。2人はあんたが嫁に来てくれて喜んでた」と返してくれた言葉で、少し救われた。

次女、詩乃ちゃん(5)が16年に生まれ、翌年には障害者施設の看護師として復職した。寿奈さん(8)は祖父が好きだった郷土芸能「請戸の田植踊」を始めた。「うちのひ孫が踊ってるって、近所に自慢したろうな」

2月23日、雑草が覆う請戸の自宅跡。晴れていた。「じいちゃんたち、みんな来たって喜ぶねー」。春奈さんが娘2人を抱き寄せる。よく笑うこの子たちに支えられてきた。過去は変えられないが、いつも願う。どうか、この笑顔が絶えない未来でありますように。(共同)



次女、詩乃ちゃんを抱え、自宅跡付近を訪れた鈴木春奈さん。右は長女、寿奈さん(2月、福島県浪江町請戸)

## ○木場祥雄より

西山さん

明後日で 10年を迎えます。被害にあわれた方々は たいへんな苦難の中で 暮らして来られたことと 改めて 思います。福島 原子力発電所の爆発がなければ もっと早く 復興されたことと思います。

オリンピックも 復興を願っての…と前安倍首相は アンダーコントロールなって勝手気ままなことを 行ってきましたが あまりにも 力の入れ方が お粗末の限りです。

今の復興大臣も 在庫一掃の大臣で そう多くを期待できそうにありません。

今や コロナ色で いろいろなことに マスコミは 本当のことを報じていないような感じがします。ワクチン購入費用は どれぐらい かかっているのでしょうか？

言い値で 買わされているような気がしてなりません。

これからの日本は どんな国になるのでしょうか？ 不安な気持ちになるのは 私だけでしょうか！

このような 気持ちの中で 西山さんのメールは すこし ほのぼのとした 感じを抱かせるようです。みんな それなりに 頑張っただけです。

八期会の皆様 まだまだ コロナは 落ち着きそうにありません。十分気をつけてお過ごしください。

西山さん ありがとうございます。

## ○西山コメント

クイック・レスポンス、さんきゅうーです。

コロナは、第2のフクシマです

実はどうしたらよいかかわからないのです

カーテンの陰から、国民という観客席をみながら、次に受けそうなセリフを考えて

それを書いて、持ってきて読んでいます。

それにして、テレビに入れ替わり立ち代わり専門家が出てきますが、フクシマのときと同じで、いろいろ解説はするが終息策だけは分からない。=====西山 和宏

## 隈元コメント

○あの日、私は71歳、1年くらい前にすべての仕事を終えて、よく言えば自分探し、悪く言えば漫然と日々を過ごす中で 3時過ぎもテレビのワイドショーを見ていました。

そこにいきなり福島地震の模様が映し出され、しばらくすると津波の恐ろしい映像が次々と…。

それからの数日間、71年の人生で初めて見る地獄絵のような映像ばかりの世界でした。

私たちだけ関係ない気持ちで過ごすのも憚れるような気持ちで、グラウンドゴルフで集まったメンバーの中に町内会長もいたので、会員には事後承諾ということで、町内会からの義援金を出すことにして、市役所にわずかばかりでしたが届けました。

あれから明日で10年ですね。

しかし、今朝の新聞によると、「避難なお4万人」「震災関連死 2万2千人」という一面記事が目飛び込んできました。

木場さんが言うように「福島 原子力発電所の爆発がなければ…」

私もその通りだと思います。しかし、政府は経済界はどうでしょう。あれほどの被害を被り尚今後数十年に渡り原発の処理が出来ないというのに原子力発電を推進しようとしています。

2021年3月9日(火) 22:40 Kazu Nishiyama <[mfikazu@tkg.att.ne.jp](mailto:mfikazu@tkg.att.ne.jp)>:

原発に放水を行った自衛官の物語です

日本で頑張っているには、いつも現場です

ヘリでの放水には、さほどの意味はないと思っていましたが、放射性物質の飛散を押さえる効果はあったようです。



水素爆発起こした福島第1原発に水を放て！

飛行隊長が振り返る2日間

この危機対応に奮闘した一人に、自衛隊の飛行隊を率いた加藤憲司氏がいる。17日に実施したヘリコプターからの放水を現場で指揮した。直前に水素爆発を起こした原発に水を撒くという世界で類を見ない“作戦”だった。地震の発生から

放水の完了まで、加藤氏は何を見、何をしたのか。(聞き手 森 永輔)

2011年3月11日に起きた大地震と津波は、福島の原子力発電所にも重大な被害をもたらした(写真:TEPCO/ロイター/アフロ)

加藤さんは2011年3月17日、全交流電源喪失に陥った福島第1原発の3号機に自衛隊がヘリコプター放水をした際、飛行隊の隊長として現場で指揮を取りました。震災対応はどのように始まったのですか。

**加藤:**3月11日に大地震が起きたのを受けて、その日の夕方、ヘリコプター「CH-47(チヌーク)」で木更津駐屯地を飛び立ち、仙台の霞目(かすみのめ)駐屯地に向かいました。当時、私は中央即応集団(CRF)隷下の第1ヘリコプター団第1輸送ヘリコプター群第104飛行隊の隊長をしていました。操縦士や整備員など15~16人がチヌーク3機に分乗して移動しました。このときは、普通の災害派遣ということで原発に放水することになるとは思っていませんでした。**被災地の状況を見て、どう思いましたか。加藤憲司氏**

2011年3月11日には、陸上自衛隊中央即応集団(CRF)隷下の第1ヘリコプター団第1輸送ヘリコプター群第104飛行隊の隊長を務めていた(写真:尾苗 清)



**加藤:**実はこの日、私は被災地を見ていないのです。ヘリから見下ろす仙台周辺はただただ真っ暗でした。それもありませんほどの暗闇です。仙台の街だけではなく、仙台空港や霞目飛行場のライトさえ消えていました。被災地の姿を見たのは翌3月12日。仙台からほど近い多賀城駐屯地(多賀城市)の状況を確認するため、車で移動したときでした。そこには言葉では言い表せない光景が広がっていました。津波の影響で道は泥だらけ。半ば流された家がそこかしこに。道路の脇には押し流された車が2台、3台と積み上がっていました。

「ほかにできる人間はいない」

原発対応の命令はいつ下ったのですか。

**加藤:** 発災から4日後の3月15日、空中放水準備の指示がありました。これは想定外でした。自衛隊の任務に原子力災害派遣がありますが、これは避難民の誘導や要介護者の搬送などを想定したものです。原発に放水するなど、原発に直接関与することは当時想定されていませんでした。

「嫌や」と言うこともできたのですか。本来、想定されていない任務です。

**加藤:** そういう選択肢はまったく頭に浮かびませんでした。原発に異常が起きていることは報道で知っていました。3月12日に水素爆発も起きていたわけですし。そのままにしておけば大惨事になりかねない。自分たちがヘリから水を撒くことで危機を押しとどめることができるならば、としか考えませんでした。ほかにできる人間はいなかったのですから。確かに危険な任務だったのですが、誤解もあります。当時、一部の新聞などが「特攻隊」と表現しましたが、決してそのようなものではありませんでした。危険を排除すべく、様々な準備をしたうえで実行したのです。チヌークの操縦席の下には鉛の板を敷き、放射線を通さないようにしました。整備員が作業をするスペースにはタングステンシートを敷いて遮蔽しました。さらに、鉛の服なども着けて臨んだわけです。「生きるか、死ぬか」という状況でやったわけではありません。

**【編集注】** 加藤氏はこう語るが、当時の陸上自衛隊制服組のトップ、陸上幕僚長を務めていた火箱芳文氏は次のように振り返る。「ヘリによる放水は命がけの任務でした。1回当たり7.5tの水が原発にドーンとかかるのです。その圧力で原子炉に負担が生じるかもしれない。そうなれば、かえって壊すことにつながりかねません。何が起こるのかわからない。誰もやったことがないのでから」

命令を伝えたとき、部下である隊員たちの反応はどうでしたか。

**加藤:** 隊員たちからも嫌がる声は上がりませんでした。

実はヘリ4機が連携した放水チーム実際の放水の命令はいつ出たのでしょうか。

**加藤:** 翌3月16日、私が所属する第104飛行隊ではなく、第105飛行隊に放水命令が下されました。ただし、この隊によるヘリ放水は中止になりました。原発周辺の放射線量が高く、危険と判断されたからです。

第105飛行隊の中止が決まった後、どう思いましたか。「いよいよ明日は自分たちの番」とか。

**加藤:** いえ、その逆で、「明日のヘリ放水はないな」と考えました。中止の理由は、放射線量が高いことです。その状況が変わらなければ、我々が行くこともありませんから。

そういうときはほっとするものでしょうか。

**加藤:** そんな暇はありませんでした。中止の話を聞いた約1時間後には、「明日はやる」と直属の上司である群長から話があったので。

そこからヘリ放水チームの人選を始めました。

どのような基準で選んだのですか。危険な任務なので、立候補を募った？

**加藤:**飛行隊には大きく2つ、飛行班(操縦士で編成)と整備班(整備員で編成)があります。それぞれの班長と相談して決めました。チーム内の練度を平準化する必要があるからです。実際に放水したチヌーク2機に注目が集まりましたが、実は放水チームはチヌーク4機から成っていました。放水した2機に加えて、Jヴィレッジ\*に1機が待機。加えて、霞目駐屯地でエンジンをオンにしたまま待機する1機です。

\*:Jヴィレッジは東京電力が整備して1997年に福島県に寄贈したサッカー施設。東京電力福島第1原発事故を受けて、対応拠点となった

Jヴィレッジに待機する機は、放水時に事故があった場合に、被害を受けた隊員を病院に搬送する役割を担います。霞目駐屯地に待機する方は、これら3機に異常があった場合に備えるもの。4機が担う役割はどれも重要ですから、どの機も同じレベルの練度に平準化する必要がありました。立候補したからと言って、その隊員に任せられるとは限らないのです。ただし、後方搬送や待機の担当になった隊員の中に、「放水をやらせてほしい」と訴える者はありました。

鉛の服など、装備は重さ20kg 3月15日に空中放水準備の命令があった後、どんな訓練をしたのですか。

**加藤:**残念ながら、しませんでした。

え、これまで想定さえされていなかった任務をぶっつけ本番で行ったのですか。

**加藤:**そういうわけではありません。3月16日に第105飛行隊が任務に就く前、防護マスクをしての予行訓練を霞目駐屯地の敷地内で行いました。ふだんは防護マスクを被って操縦することはないですから。この中に、われわれ第104飛行隊の隊員が一部、加わっていました。また、我々の部隊は常日頃、山火事への対応などで放水を実行しています。防護マスクや防護服の着用を除けば、基本的には、山火事の消火と同じ技術で対応できる作戦でした。ただ、この防護マスクと防護服の負担が非常に重い。最も困ったのは視野が狭まることです。ヘリコプターのパイロットは通常、周囲360度を見渡せる状況で操縦しています。それが、顔の正面にある直径10cm程度の2つの窓に限られてしまうので。加えて、防護マスクは重さが約2kgありました。

頭に2kgのものを被るのは、相当の負担ですね。

**加藤:**重だけでなく、これを着けるとほかの隊員との通信がしづらくなるのです。防護マスクの上にかぶる通常のヘルメットにスピーカーとリップマイクが付いています。防護マスクは分厚く、声が漏れず、マイクが音を拾えないのです。なので、怒鳴るほど大きな声で話をしなければなりません。そして、飛行服の上に4kgの防護服、その上に15kgの鉛の服。

鉛の服ですか。

**加藤:**はい。内臓を放射線から保護するもので、通常の上着のように羽織って身に着けます。首を保護するため、鉛の襟巻も付属していました。

それは重い。

**加藤:** ええ、ふだんより約 20kg 分余計に着込むことになるので。そして、なんとも動きづらいのです。防護服も鉛の服も厚みがあるので、パイロットは自由に腕を動かすことができず、操縦がしづらかったと思います。

水を運ぶのに使った円錐形のバケツのようなものもふだん使っているものですか。「野火消火器材 I 型」と呼ぶそうですね。

**加藤:** そうです。山火事などの消火に使うものです。

半径が 2~3m の傘を思い浮かべてください。強化ビニールのようなものでできています。重さはかなりあり、隊員 7~8 人がかりでないと運ぶことができません。カナダのバンビバケットという会社が製造しています。 たたんだ傘を海中に入れ、開く。そうすると、傘の中に水がたまります。傘が開く角度は 60 度くらいでしょうか。そして、水がこぼれないよう、上の部分をベルトで締める仕組みになっています。 海水を汲んでから原発までは、ヘリからぶら下げたまま移動します。

**【編集注】** 加藤氏は 1995 年、仙台の大学を卒業したのち自衛隊に入隊。自衛隊人生のおよそ半分をヘリパイロットとして過ごしてきた。入隊後は、幹部候補生学校で 1 年弱学んだ後、霞目駐屯地に配属。しかし仙台にはほとんどおらず、茨城県や三重県のヘリパイロット養成施設でトレーニングを受けた。そして木更津駐屯地のヘリコプター団で約 10 年を過ごす。その後しばらく、幹部学校、体育学校、陸上幕僚監部に配属されヘリの現場を離れるが、約 6 年後に再びヘリの仕事に。木更津にある中央即応集団 (CRF) 隷下の第 1 ヘリコプター団第 104 飛行隊の隊長として赴任した。

3 月 17 日、いざ放水へ

そして、3 月 17 日が訪れます。前の晩はよく眠れましたか。

**加藤:** 3 時間くらい寝たでしょうか。

たった 3 時間ですか。

**加藤:** 机上のシミュレーションを深夜、日付が変わるくらいまでしていました。放射線量に応じて、どれくらいの高度をとれば被ばくを抑えることができるか、といったことをケースごとに試算する作業です。 その後、宿舎代わりにテントに戻って寝ました。災害派遣中は 1 つのテントに 2 人で泊まりました。訓練であれば、隊長は 1 人で 1 つのテントを使えるのですが、テントの中には高さ 50cm ほどの簡易ベッドがあり、その上で寝袋に入って寝ました。

3 月の東北。屋内といってもテントの中で寝袋。寒かったことでしょう。

**加藤:** 翌朝は 3 時ごろから起き出して、4 時からチヌークの飛行前点検に当たりました。

そして、いよいよ出発のとき。

**加藤:**霞目駐屯地を飛び立ったのが午前 8 時 58 分。南に進路を取り、福島第 1 原発に向かいました。

放水を最終決断したのは、どの時点でしたか。

**加藤:**福島県相馬市にある火力発電所付近を通過する所でした。放水を始める 10 分くらい前です。先発して、原発周辺の放射線量を測っていた「UH-60 (ブラックホーク)」から報告があり、被ばくすることなく放水できることが確認できたからです。

気持ちに変化はありませんでしたか。

**加藤:**なかったですね。やる(編集部注:放水する)つもりで出発し、測定された放射線量も予定通り。ならば「やる」という感じでした。

水はどこで汲んだのですか。

**加藤:**原発の沖、2km ほどのところですよ。

水を汲み、いよいよ福島第 1 原発第 3 号機を目指しました。

**加藤:**水を汲んでから原発まではほんの数秒です。3 月 14 日に水素爆発を起こしている 3 号機の姿は、屋根のない家という感じでした(記事冒頭の写真を参照)。

へりはどの方角から原発に向かったのですか。風が強かったそうですね。

**加藤:**福島第 1 原発の南東から時速 30km ほどで入りました。高度はおよそ 90m。西寄りの風、秒速 10m 以上の強風が吹いていました。

西寄りの風なら、福島第 1 原発の南西から入る方がよかったのでは。風上にいる方が、放射線の影響も避けられるし、放った水も 3 号機に当てやすいのでは。

**加藤:**福島第 1 原発では 1 号機～4 号機が南北に並んでおり、その西側に大きな煙突が立っているのです。なので、1 号機～4 号機の西側から回り込むことはできない状況でした。

風向きが変わるのを待つとか、風がやむのを待つとかはできなかったのですか。

**加藤:**その選択肢もありませんでした。風向きが変わる予報は出ていませんでしたし、我々とは別に地上での作業が進んでいました。彼らの頭の上から水を撒くことはできません。また暗くなったら下が見えないので、撒けないですし。

いろいろな制約条件の下での放水だったのですよね。強風の中、最後は放水ボタンを押すタイミングが重要になります。

**加藤:**それは機長と整備員が連絡を密にとって決め、実行しました。山火事への対処と同じ要領です。3号機に近づくまで、機長は3号機を見ることができず、チヌークの後方部分にいる整備員は3号機を見ることができません。一方、水を撒く瞬間、整備員は直上から3号機を見ていますが、機長の位置から3号機を見ることはできません。

そして整備員が野火消火器材I型の弁を開くスイッチを押しました。彼らはチヌークの後方部分の床にタングステンシートを敷き、その上に寝そべてハッチから下を見ながら作業しました。タングステンシートは1畳ほどの大きさで、ちょうど人1人分くらいの面積。密度が高い素材なので、かなり重かったことを記憶しています。海水を汲んで、撒く。これを2機のヘリで2回繰り返しました。1回当たり約7.5t、合計約30tの水を撒きました。

**加藤さんはどこにいたのですか。**

**加藤:**チヌークには操縦席が左右に並んで2つあります。進行方向に向かって右が機長席、左が副操縦士席。この2つの席の間、少し下がった位置にもう1つ席があります。私はそこに座って見守っていました。自分で操縦すると、先ほどの最終決断が疎かになりかねないので。

**放水した水がターゲットである3号機に正しく当たっているかどうかは確認できましたか。第1回目の放水の結果を見て、以降の回の放水ポイントを変更したりするものでしょうか。**

**加藤:**残念ながら私の席は、下が見えない位置でした。

ただし、放射線量を測るために周囲を飛んでいたブラックホークが状況を知らせてくれました。これを参考に修正をするわけです。結果として、大きな修正は必要ありませんでした。

**放水の効果は現場で実感できましたか。**

**加藤:**できませんでした。3号機の姿は何も変わらないので。山火事なら、何度か水を撒いているうちに煙がなくなったり、炎が小さくなったりするので実感できます。しかし、原発は、そうした変化を見せてくれませんでした。

**【編集注】** 火箱氏はヘリ放水の効果についてこう語る。「すぐに効果を検証することはできませんでした。しかし、放射線量が低下したと後になって知らされました。周囲に舞っていた放射性物質が水で拡散しない状態になったようです。懸念していた燃料プールにも水が入ったので、放射性物質が拡散する勢いをそぐことができました。これが、地上からの放水につながりました」

**達成感なき放水**      **放水を終了した後、最初に感じたことは何ですか。**

**加藤:**任務に参加した全員がケガすることもなく無事よかったな、ということでした。**【編集注】** 3月14日の午前11時01分には、同じ3号機で水素爆発が起こり、自衛隊員が負傷している。加藤氏のチームが相対したのは、そんな相手だった。任務終了後の健康診断で、浴びた放射線量はレントゲン検査3回分くらいと診断されました。この点も

安心しました。任務中はずっと線量計を身に付けていました。限度を超えると音が鳴って警告するものです。これが警告を発することはありませんでした。

任務を遂行するにあたって、隊員を気遣うために何か工夫をしましたか。

**加藤:**特別なことはしていません。鉛の服などできる限りの準備はしていましたが、任務の要領も隊員にブリーフィングしてあったから。1つあるとすれば、「現場で放射線量が突然上がるなどした場合は自分が中止を判断して帰投する」と明確に伝えていました。私が隊長として最も重視したのは、先ほどご説明した、相馬沖で下した最終判断でした。「達成感はない」と発言されていますね。それはなぜですか。

**加藤:**震災による被害の全体を見渡せば、何も変わっていないからです。その夜、霞目駐屯地に戻っても、地上から放水する体制が確立できているかどうか分かりませんでした。

また、翌日も再び、放水に飛ぶ可能性もゼロではありませんでした。もしやるなら、より効果的な方法はないか考える必要があります。この日の任務が終わったからと言って、原発対応が終わったわけではなかったのです。

気が抜けない状態が続いたのですね。

**加藤:**災害派遣はそういうもの。仮に原発が落ち着いても、避難物資の搬送などほかの仕事が山積していました。被害に遭って食料もない人が周りにたくさんいましたから。

我々はその晩、缶詰で食事を取りました。缶詰があるだけでも有り難い状況でした。現場で働く自衛官の中には、自分の分の缶詰を、被災して食料がなく困っている方に分けている者もいました。

### 家族は木更津で震災と戦った

この任務に当たることをご家族にはいつ、どのように伝えたのですか。

**加藤:**へり放水を実施した後、もしくは、その翌日だったでしょうか。

実は、3月11日に木更津を出発したことすら伝えていませんでした。出勤命令が出て、必要な物資、機材を積み込んでいるうちに出発時間になってしまったからです。仙台に到着した後、2~3日は携帯電話が通じませんでしたし。

でも、私が被災地に來ていることを家族は知っていたと思います。当時は自衛隊の官舎に住んでいて、私と同様に帰宅しない隊員が近所にたくさんいたはずですから。え、ならば、へり放水がテレビで放送されていたとき、ご家族は加藤さんが乗っていると知らずに見ていたわけですね。

**加藤:**見ていたかどうか分かりませんでした。木更津も津波を受けて、たいへんなことになっていました。自宅の車は津波のせいで浮いてしまい、廃車することになりました。

ヘリ放水を実施した3月17日は小学校6年生の子供の卒業式でした。停電のため、体育館が暗かったので、ろうそくに火を灯して、式を行ったそうです。

**【編集注】** 加藤氏は、「家族軽視と言われると困るのですが」と頭をかく。任務が一段落し、木更津の自宅に初めて帰れたのは、春の連休のころだった。

## 傍白

加藤氏が「(ヘリ)放水任務を終えても達成感を覚えなかった」と発言したことに触れた。しかし、本人の認識と異なり、世界は自衛隊をはじめとするオールジャパンの震災対応を高く評価した。スペインのフェリペ皇太子が2011年10月、福島第1原発事故の対応に当たった警察、消防、自衛隊の現場指揮官5人に「共存共栄賞」を授与した。このうちの一人に加藤氏も名を連ねた。

同賞は「人類への貢献」を顕彰するもので、「スペインのノーベル賞」と呼ばれる。かつて緒方貞子氏・元国連難民高等弁務官(国際協力部門)も受賞している。

同国北部オビエドで行われた授与式で同皇太子は「日本社会の結束に感銘を受けた。世界の模範になるものだ。英雄たちの勇気と強さにも感動した」と発言した。

この評価は凶らずも、加藤氏が自衛官を目指した理由の一端を実現するものとなった。同氏は、1992年に自衛隊が国連PKO(国連平和維持活動)に初めて参加したのを目にして「海外に困っている人がいる。日本人として彼らを助けることに貢献できたら」と夢を膨らませた。しかし「どこにも(編集部注:困っている人を助ける任務で海外に)行ったことがなかった」という。

未曾有の任務である福島第1原発3号機へのヘリ放水は加藤氏に、人助けを媒介にした海外とのつながりをもたらすことになった。

=====西山 和宏

## ○西山くん 大石コメント

いい記事を読ませていただきました。

加藤自衛官のインタビュー内容は感動しました。まさにドキュメンタリー(臨場感)たっぷりでした。

いろいろな特集番組が放映されました。

あの時政府(内閣)とのやりとりでいちばん主役であった人(3年後癌で亡くなられた)の顔は脳裏に焼きついていますが、テレビ画面で実際の記録映像を見ることは出来ませんでした。放映されたのかもしれませんが…作られたドラマ(俳優を使っただけ)は観ましたけど。

あと10年後の特集番組はどう変わっているか観てみたいけど叶いますか？

一方、大津波が目の前に迫っている時の身の振り方、勇気や冷静さが自分の命を失った現実も多く見せつけられました。

## ○西山さんこんにちは

### 木場祥雄コメント

どうして こんな タイムリーな お話しメールしていただき 一気に読みました。

10年前の今日 2時半過ぎ奈良地方でも スーパーで買い物して居たら 建物、商品棚が ゆっくり 揺れ動くような感じを受けたこと覚えています。

家に帰って TV 見たら たいへんな光景でした。

さすが 自衛隊 よく 強力していただいたことだと 仰天びっくりしています。

福島原発事故が あった為 未だに 相当多くの住民が 帰還できずに 困っておられるニュースが TV で 放映されていました。

この事故は 人災ということのようですが 東電の経営者の態度は 納得しかねております。

オリンピックも 復興を…と願い！ おこなわれることになっていますが すこし ピンぼけしたような 感じがしてなりません。

前 安倍総理大臣 復興に対する対応も もう一つといった感じでした。

淡路神戸地震と時の 復興のスピードと 今回は この原発事故が 重なったため 多くの住民の皆様もたいへんなご苦勞をされておられるようです。

感じたまま 書きました。

いつも タイムリーに メールしていただき ありがとうございます。

また、なにか…を 期待しながら 待っています。木場 祥雄

## ○西山くん提供

### ○福島第1原発2号機にホウ酸をまけ！幻で済んだ自衛隊決死の作戦 2021.3.11

2011年3月11日、東日本を未曾有の大地震が襲った。

地震は津波を引き起こし、海水が街を飲み込んだ。家々を押し流し、人々から大事なものを奪い去った。その光景はいまでも私たちの記憶にとどまったまま離れることがない。

大地震は津波被害に加えて、目に見えない恐怖を引き起こした。福島第1原子力発電所の全交流電源喪失である。原子炉の中を見ることはできない。放射性物質を見ることもできない。しかし、その存在は、日本を分断しかねない危機をもたらした。

この原発危機を押しとどめるのに奮闘した一人に、当時、陸上自衛隊で制服組トップの陸上幕僚長を務めていた火箱芳文氏がいる。火箱氏には「[陸上自衛隊トップ、辞任覚悟の出動命令](#)」で地震・津波対処について語ってもらった。今回は、原発事故対処に焦点を当てて振り返ってもらう。ヘリコプターを使った3号機への放水、そして地上からの放水は、報道機関が争って取り上げた。これに加えて、火箱氏らは「鶴市作戦」と呼ぶ極秘作戦を検討、準備していた。これが実行されていれば、自衛官が“人柱”のようにになっていた可能性がある。さらに、自衛隊の役割をめぐる官邸、他省庁との調整という思わぬ課題に直面した。（聞き手：森 永輔）

インタビュー記事「[陸上自衛隊トップ、辞任覚悟の出動命令](#)」では地震・津波対処について話をさせていただきました。今回は、福島第1原子力発電所で起きた事故への対処についてお伺いします。

発災当初は、自衛隊が中心になって原発に対処することになるとは思っていなかったそうですね。

**火箱**：そうなのです。原発が緊急事態に直面していることを明確に示す情報が入ってこず、「危険だ」という認識はありませんでした。

3月12日の15時36分に1号機で水素爆発が起きました。枝野幸男官房長官（当時。以下、肩書はすべて）は「爆発的事象があった模様です」という曖昧な表現をしており、ピンときませんでした。**火箱 芳文（ひばこ・よしふみ）**

また、原発に水をかけるなど原発そのものへの対処は自衛隊の本来任務ではありませんでした。自衛隊法に原子力災害派遣が任務として定められています。これは避難民の誘導や要介護者の輸送、除染所の運営など、原発の周辺で行う任務を想定しています。自衛隊には原発の構内に入る権限すらありません。

「原発が危険だ」という意識を持ったのは3月14日11時01分に3号機が水素爆発を起こしたときでした。テレビで状況を見て、「ん、何だこれは。原発が危険だ」と思いました。ここで認識を改めたのです。

そして津波と原発を相手にした自衛隊の2正面作戦が始まりました。

## 2 正面作戦にはどのような態勢を取ったのですか。

**火箱**：津波対処にはJTF東北\*が、原発対処には中央即応集団（CRF）が当たりました。それまで福島県では、第12旅団が津波対処に当たっており、時折、東京電力からの要請を受けて水や油を提供したりしていました。ですが、原発に本格的に対処するとなると、空中機動に優れた12旅団はあるものの、十分な装備や専門知識を持った要員がいません。

\*：JTFはジョイント・タスク・フォースの略。陸海空の3つの自衛隊を統合的に運用するための仕組み。JTF東北の司令官は陸上自衛隊の君塚栄治・東北方面総監。同氏の下に海上自衛隊横須賀地方総監と航空自衛隊の航空総隊司令官が加わる形を取った。

中央即応集団に指示が出たのは、3号機で水素爆発が起きた直後の11時5分でした。中央即応集団は、ゲリラや特殊部隊、特殊武器による攻撃に対処する能力を持つ部隊で、機動運用部隊（第1空挺団、第1ヘリコプター団など）や各種専門機能部隊（中央特殊武器防護隊、特殊作戦群など）を麾下（きか）に置いています。中央即応集団の中央特殊武器防護隊、第一空挺団、中央即応連隊など500人からなる体勢をか」と言われたのです。これがヘリ放水の始まりでした。「そこまで状況は深刻なのか……」。3号機の水素爆発に次いで驚きでした。このとき、誰も即座に反対はしませんでした。会議後の4幕長が集まった席で、陸上自衛隊でやりますと私が買って出たのです。「方法を検討します！」

当時は地上放水が可能かどうか情報が入ってきておらず、「原発に水をまくならヘリからしかない」状況でした。そして、保有しているヘリを考えると「陸上自衛隊しかない」と考えたのです。原発に一度に大量の水をまくには大型のヘリコプターが必要。陸海空の自衛隊が持つヘリの中で最も大きいのは陸上自衛隊の「CH-

47 (チヌーク)」です。加えて、練度の高い第1ヘリコプター団がいる。彼らは日頃から、山火事の消火に当たっています。ただし、ヘリによる放水は命がけの任務でした。1回当たり7.5tの水が原発にドーンとかかるのです。その圧力で原子炉に負担が生じるかもしれない。そうなれば、かえって壊すことにつながりかねません。何が起こるのか分からない。誰もやったことがないのでから。

この会議ののち、情報を集め始め、放水をどのように実施するかを考えました。今回のようなケースを自衛隊では「状況不明下の作戦」と呼びます。その第一歩は「危険見積もり」。起こり得る事態を挙げ、公算が大きい順にならべます。このとき、最も公算が大きいのは燃料プールが干上がることでした。原子炉そのものには海水の注入が始まっていたから。燃料プールが干上がると放射性物質が拡散し、その後の対処がさらに困難になってしまいます。

次に、3号機と4号機、どちらの危険度が高いかを考えました。この時点では4号機の方が危険と判断しました。こちらに格納している燃料棒の方が新しく、拡散する放射性物質がより多いと想定されたのです。

状況不明下の作戦で考える第2は、最悪の事態に何が起きるかです。最悪は原子炉のメルトダウン、メルトスルーでした。これは何としても避けなくてはなりません。

**それが幻の鶴市作戦につながるのですね。それについては後で伺います。**

**火箱**：3つ目のステップは相手の弱点は何かを考えることです。原発事故が乗じる最大の弱点は時間でした。時間がたてば被害が拡大してしまいます。なんとか早く、事態を抑え込まなければなりません。

**3月16日に行った1回目のヘリ放水は放射線量が多いため中止しました。火箱さんはひどく怒ったそうですね。それは時間を重視していたからですか。**

**火箱**：その通りです。「何をやっているんですか。時間がないじゃないですか？」と、尊敬する折木良一・統合幕僚長に不遜にも詰め寄りました。その後、折木さんが、中央即応集団(CRF)の宮島俊信司令官に「明日はやるように」と指示を下したようです。

**そして翌3月17日、3号機への放水が実行されました。効果は検証できたのですか。**

**火箱**：すぐに検証することはできませんでした。しかし、放射線量が低下したことが後に明らかになっています。周囲に舞っていた放射性物質が水で流されたのでしょう。懸念していた燃料プールにも水が入ったので、放射性物質が拡散する勢いをそぐことができました。これが、地上からの放水に道を開きました。

米国の姿勢もこれによって変わりました。バラク・オバマ大統領(当時)は自衛隊が動いたのを見て、「素晴らしい」と菅直人首相(当時)に伝えたそうです。ここからトモダチ作戦が本格化しました。

**自衛隊による放水の「指揮」を拒否ヘリ放水のかがあって、地上からの放水も始まりました。**

**火箱:**折木統幕長から3月16日、「地上からも放水してくれ」との指示がありました。

地上からの放水をどうすれば実行できるかを詰めている3月17日昼、北澤防衛相が「警察が(放水を)やりたいと言っている。自衛隊が指揮できるか」と尋ねてきました。これは難しい話です。自衛隊が、地方公務員である警察を指揮する権限を定めた法律はありません。

その後、地上放水は自衛隊だけでなく警察や消防も参加して、現場が混乱したそうですね。

**火箱:**そうなのです。なので、中央即応集団の田浦正人副司令官(当時)が「中央での調整が必要です」との意見を松下忠洋・現地対策本部長(経済産業副大臣、当時)に具申しました。すると官邸から、首相補佐官名の指示書案が届きました。「3月18日の放水活動基本方針について」というものです。

これを読んで、正直言って驚きました。原発対処の拠点になっているオフサイトセンターの「統制権」を自衛隊が持って「指揮をしろ」と書かれていたのです。先ほどお話ししたように、そんなことを可能にする法律はありません。

加えて、首相補佐官からの指示書では何の法律的根拠もありません。首相補佐官は田浦副司令官の意見を知り、気を利かせてくれたのだと思います。“お墨付き”がないと田浦副司令官は動きづらだろう、と。しかし、この表現では自衛隊は動けません。自衛隊の指揮官が警察に「(編集部注:自衛隊より)先に警察が行け」と命じたら、いったいどうなるでしょう。

急ぎ、番匠幸一郎・防衛部長(当時)を呼んで、指示書案を修正してもらおうよう調整を依頼しました。大事な点は2つ。1つは首相名の指示書にすること。もう1つは「自衛隊が全体の指揮をとる」との表現を改めることです。

結果として、正式な指示書は原子力災害対策本部長である菅首相の名前で出されました。指揮に関する表現は「自衛隊が現地調整所において一元的に管理すること」と修正されました。私は胸をなでおろす思いでした。この表現ならば、どの組織が、いつ、どのように放水するかを皆で話し合う場の議長役ですみます。命に関わる責任を自衛隊の現場指揮官が負うことにはなりません。

田浦副司令官は現場で「指揮」「管理」という言葉は一切使わず、「調整役」になりましたと挨拶し、その通りに振る舞いました。

表現上の修正はあったにせよ、オフサイトセンターの混乱は収束に向かったわけですね。ということは、指示書の効果はあった。

**火箱:**はい、そう思います。自衛隊に協力してください、と首相が他の省庁に指示して、そのように動いたわけですから。

次に同じような事態が生じたとき、省庁間連携はきちんとできるのでしょうか。改善策はできているのですか。

**火箱:**その後、2013年に国家安全保障会議が設置されました。ここが全体を調整する役割を担うことになるでしょう。

2号機に降り、ホウ酸をまく自衛隊はヘリと地上からの放水だけでなく、原発そのものを封じ込める作戦まで練っていました。

**火箱:**そうですね。時間は3月15日の昼に戻ります。北澤防衛相から「原発に水をまいてくれないか」と言われた直後の11時ごろのことでした。防衛大臣補佐官が部下を連れて私を訪れ、「この人の話を聞いてください」と言うのです。チェルノブイリ原発事故の研究をしている人物でした。

彼いわく。「2号機の原子炉にホウ酸をまいてください」

彼の見立てでは、2号機はすでにメルトダウンもしくはメルトスルーを起こしている可能性がある。事態を抑えるためには、ホウ酸をまくことが有効、ということでした。ホウ酸はホウ素を含む化合物で、ホウ素は中性子を吸収する特性を持ちます。

ホウ酸をまく方法を問うと、「お任せします」という答えでした。

このとき、頭に浮かんだのは、チェルノブイリ原発事故への対処でした。ホウ酸、石灰、鉛、粘土、砂など50tをまいて放射線の放出を抑えたのち、外側をセメントで固めて「石棺」にしたのです。

「これは犠牲者が出るな」。チェルノブイリ原発事故の対処では作業員の多くが大量の放射線を浴び、死に至りました。生き延びたものの、後遺症に苦しめられている人も大勢います。

しかし、最悪の事態に備えるのが私たちの仕事です。こうした任務が命じられる可能性はゼロではありません。準備を進め、やり方を検討するよう部下に命じました。

原子炉にホウ酸をどうやってまこうとしたのですか。2号機は建屋が残っていました。

**火箱:**航空写真を精査したところ、建屋の屋根の上に1~2mほどの亀裂があるように見えました。そこで、ヘリコプターを上空でホバリングさせ、袋に入ったホウ酸をスリングネットに入れてロープで降ろし、亀裂から中に入れたところで切り離す、という案を考えました。1袋は20~30kg。250袋で7.5t程度。チヌークならば一度に9tほどのホウ酸を運ぶことができます。

しかし、この案はすぐについえました。亀裂に見えていた筋は単なる傷だったのです。

次に検討したのは、建屋の壁に開いている穴からホウ酸を投入する策でした。

「これは決死隊になる」

隊員が建屋の上に降り、壁の穴に近づき、ホウ酸の入った袋を投げ入れる必要があるからです。この隊員はもちろん、上空でホバリングして待つヘリの操縦士も致死量に近い放射線を浴びることを覚悟しなければなりません。

「しかし、最悪の場合は、福島を境に日本列島が分断されかねない」。もしものときには決断しなければならないと覚悟を決めました。人の命は地球より重いけれども、私たちの任務はさらに重い——。なぜなら、私たちのほかにできる人間はいないのでから。

もちろんそうなったときには私も参加するつもりでした。行くなら、退官間際の人間の方がよいでしょう。私自身にとっても、その方が慰めになります。

## 頭に浮かんだ「お鶴と市太郎」の物語

この作戦について検討しているとき、私のふるさとに伝わるある伝承を思い出し、周囲の皆に話しました。お鶴と市太郎が地元の人々のため「人柱」になった話です。

私が生まれた福岡県と大分県の県境に沿って山国川という川が流れています。平安時代、この川はたびたび氾濫し、井堰を壊して周辺の村々に被害をもたらしました。これを収めるため、湯屋弾正基信という地元の地頭の筆頭が人柱として立つことになった。すると、彼の家臣の娘であるお鶴と、その子・市太郎が「父祖の代から被ってきた恩に報いるのは今」と身代わりを申し出たのです。2人は断食沐浴(もくよく)したのち、新しい井堰に塗り込められました。それ以来、山国川が氾濫してもこの井堰が壊れることはなかったということです。

幸い、この鶴市作戦は実行せずすみ、自衛官を人柱のようにする不幸を見ずにすみました。

火箱さんたちはこの鶴市作戦の準備を極秘で進めました。仮に情報が漏れていたらどうなっていたでしょう。

ヘリ放水についても「自衛官の命を危険にさらすのか」と批判が出ていました。

**火箱:**この作戦の存在を知っていたのは、陸上幕僚監部で私の周囲にいた数人と、運用支援部長。現地にいる中央即応集団の宮島司令官とその隷下の金丸章彦・第1ヘリコプター団長くらいでしょうか。折木統幕長にも報告はしておりません。

国民はどう反応したでしょう。世論が2つに割れることになったかもしれません。

「そんな作戦はするな。自衛官を大事にしろ」という考えと、「進めろ。日本が分断される危機なのだ」という考えと。

いずれせよ、この作戦を実行しなくてすみ、本当によかったです。

## 幻ですんだ大規模避難計画

4つ目の柱について伺います。大規模な避難計画を検討したそうですね。

**火箱:**ええ。4月に入ってからのことです。原発の状況はだいぶ収まっていました。

しかし、まだ余震がありましたし、いつまた水が入られなくなるとも限らない。

そのときにどうすべきかを考えました。東京電力の職員や周囲の住民をどこに避難させるべきなのか。バスで避難させるならば、対象となる人員の数も調べなければなりません。当時、30km圏内には数万人の人がいたと思います。

統合幕僚監部が担当する仕事だったので、担当者に「まずは事故を起こした原発の最も近く、『中心』にいる人から逃すべきだ。その手段を考えるのが先決だ」と話をしました。そして、陸上自衛隊にも協力する準備を進めさせました。

再び水が入られなくなったり、水素爆発が起こったりしたときに、中心にいる人を救出する。これも、自衛官が被ばくする事態が避けられない任務ですね。

**火箱:**おっしゃる通りです。しかし、ほかにできる人がいないのですから。

陸上自衛隊の補給処で、装甲車の屋根に手すりを溶接して付け、人々を屋根に乗せたまま走れるように改造しました。運転手は乗ったまま、救出すべき人を短時間で乗せる工夫です。

中央即応集団の下にある中央即応連隊には、この装甲車を使って実際の運搬作業をシミュレーションさせ、現地で予行もしました。夜中でも 30km 圏外へ短時間で移動するための経路を確保する。同連隊の 300 人には、他の任務を一切与えず、いわき海浜自然の家に待機させ、これに専念させました。この避難計画も幸い、幻で終わりました。今振り返っても、ほっとする思いです。

○西山 和宏提供

トモダチ作戦、米兵はシャワーすら浴びなかった一等陸佐 笠松誠氏に聞く 2019.3.9

2015 年 3 月 10 日に公開した記事を再掲載しました。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生した。被災民の救助、被災地の復旧・復興を考えた時、いの一番に行なわなければならないことの一つが、物流インフラの復旧だった。

被災地では、ありとあらゆるものが地震で壊れ、津波で流された。物流が機能しなければ、救護物資も救援物資も、被災者の元に届けることができない。地上の交通網が寸断される中で期待されたのは、物資を空から届ける方法だった。

その空の道を切り開くのに大きな力を貸してくれたのが米軍だ。東北の空の玄関である仙台空港を復旧させるプロジェクトに、「トモダチ作戦」の一環として加わってくれた。そのおかげで、わずか 1 カ月のうちに、民間航空機の離着陸が可能になった。

仙台空港復旧プロジェクトにおける米軍の協力はいかなるものだったのか。トモダチ作戦が持つ安全保障上の意義は何か。トモダチ作戦の経験は今、どのように役立っているのか。仙台空港復旧プロジェクトで米軍との調整の最前線に立った笠松誠・陸上自衛隊国際防衛協力室長(当時。現在は陸自西部方面総監部情報部長)に聞いた。(聞き手は森永輔)

仙台空港の復旧プロジェクトはどのように進化したのですか。

笠松:これには、米海兵隊のクレイグ・S・コゼニスキー大佐をはじめとする米陸海空海兵隊が大きな役割を果たしてくれました。

### 笠松誠(かさまつ・まこと)

東日本大震災発生時に陸上自衛隊・国際防衛協力室長。現在は西部方面総監部情報部長。1965年生まれ。愛知県立大学卒業後、自衛隊に入隊。北部方面ヘリコプター隊、第1次イラク復興業務支援隊、在パキスタン日本国大使館防衛駐在官、幹部学校戦略教官などを歴任して現職。

東日本大震災が発生した当時、陸上自衛隊の幹部学校で戦略教官を務めていた私は、国際防衛協力室長に異動することが内定していました。これは外国との間で様々な協力関係をつくる部署です。震災の発生を受けて3月18日、仙台に向かうよう命じられました。

まるで海に沈んだかのように冠水し、悲惨な状況を呈していた仙台空港の姿を見た時は、復旧には半年はかかるだろうと考えました。建物は焼失し、管制の機能はすべて失われていましたし。

悲観する我々の背中を押し、短期間での復旧を目指す提案をしてくれたのがコゼニスキー大佐でした。彼が勤務していた海兵隊のキャンプ・フジには様々な重機や大型トラックがあります。「それを使うのは今しかない」と言ってくれたのです。海兵隊の司令部は、一度は待たせかけました。米軍が復旧作業に関わった時に日本国民がどのような反応を示すか分からないので、慎重になったようです。しかし、コゼニスキー大佐がそれを説得してくれました。

### 「我々の装備を使うのは今だ」

米軍は当初から二つの明確な方針を持っていました。一つは空輸活動のハブとなる空港を開通させること。もう一つは、その空港を復旧のシンボルとすることです。海水と瓦礫によって大きなダメージを受けた空港を復旧することができれば、被災民にも「自分のところも復旧できる」という希望を持ってもらうことができます。

笠松さんは現地でどのような役割を果たしたのですか。

笠松:陸上自衛隊は震災に対応するため東北方面総監部に災害統合任務部隊(JTF-東北)を立ち上げました。司令官は君塚栄治・東北方面総監(当時)です。その司令部の配下に設置された日米調整所仙台空港現地調整所長(当時)として詰め、米軍や空港関係者との連携に当たりました。

ホワイトボードの正面に座っているのが笠松誠・陸上自衛隊国際防衛協力室長(当時)

米軍は3月16日、米太平洋特殊作戦コマンドを仙台空港に派遣し、復旧作業を開始した。同コマンドは空港のないところに空港を造る特殊作戦のエキスパートだ。臨時の航空管制機能を設置する技術も有している。3月18日には、コゼニスキー大佐が率いる海兵隊が到着。休む間もなく、瓦礫を除去する作業の準備に着手した。翌日から、米空軍が空

米軍と協力して作業を進める中で印象に残っているのはどういう点ですか。

笠松:彼らが「日米の間には文化面のバリエーションがある」ということをよく知っていてくれたことです。バリエーションを越えるのは容易なことではありません。しかし、その存在を意識しているのといないのとでは、行動が全く異なります。

例えば彼らは、被災者や空港職員と出会うとお辞儀をしていました。私は他の国で活動する米軍の姿を幾度も目にしてきましたが、あんな光景を見たのは初めてでした。

それだけではありません。彼らは自由に使えるシャワーユニットをいくつも持っているにもかかわらず、それらを使おうとはしませんでした。3月とはいえ重労働をしているので汗もかいたことでしょう。髭も剃らないので、ぼうぼうになっていました。なぜかと聞くと、「我々が使わなければ、被災者の誰かが使えるから」と答えるのです。

宿舎として使う天幕も簡易で小さなものを空港敷地の隅に立てて使っていました。彼らは、パソコンと巨大ディスプレイを使った会議などができる本格的な天幕を持っているにもかかわらずです。これも「余計なスペースを使わなければ、被災者が何かに利用できるかもしれないから」という理由でした。

**まさにトモダチ作戦の名前通り、米軍は友達として振る舞ったんですね。**

笠松:はい。幹部学校の教官としてうれしいこともありました。教え子だった米陸軍からの留学生が偶然、仙台空港の復旧プロジェクトに配属されていました。ある時、彼女が「教官、たいへんです」と言って私のところに飛び込んできたのです。

聞いてみると、米軍が業者に発注して設置した簡易式トイレに黄と黒のトラテープが張り巡らされていて、「US ONLY」という張り紙が貼られているというのです。簡易式トイレの業者が、契約者である米軍に配慮して張り紙を張ったのでしょうか。彼女は、「もし被災者がこれを見たら、誤ったメッセージが伝わってしまう。早く取りはずすよう調整してください」と私に要請したのです。

私は2005年に防衛駐在官としてパキスタンに赴任していました。この時、大地震が起きた。救助・救援のためにいちばんに駆けつけたのは米軍でした。しかし、彼らはパキスタンの人々の気持ちを慮ることができませんでした。パキスタンはイスラムの国であるにもかかわらず米軍は土日に関し、上半身裸になってキャッチボールをしていた。あれでは、むしろ行かないほうがよかったくらいでした。

米軍は3月31日、仙台空港でのプロジェクトを終えて去っていきました。その最後に何をしたか。彼らはなんとゴミ拾いをして帰ったのです。あれだけの瓦礫を撤去した後です、チューインガムの一つくらい落としていったとしてもバチは当たりません。そして、4月13日、念願だった民航機の運航が再開されました。

**まさに立つ鳥後を濁さずですね。トモダチ作戦で米軍は、どうしてパキスタンの時とは全く違う行動を取ったのでしょうか。**

笠松:やはり長年にわたって日本に駐留していることが大きかったのだと思います。コゼニスキー大佐がこんなことを言っていました。彼がキャンプ・フジの周辺でふだん接しているおじいさん、おばあさんと被災者の像が重なるのだと。おじいさん、おばあさんと同じような人が東北の地にもいる。その人たちを助けたいのだと。

**ゴミとなったクルマにもオーナーがいる。キャンプ・フジ周辺のおじいさん、おばあさんが東北のおじいさん、おばあさんを救ったのだと言えますね。**

米軍がまさに友達として被災民の気持ちを汲み取り、行動してくれたのは本当に有り難いことです。しかし、ご苦労

も多かったのではないのでしょうか。仙台空港復旧プロジェクトは事前にシナリオを決めていたわけでもなく、訓練をしていたわけでもありません。突然、起こった大災害に対して、いきなり集められた日米の部隊や空港関係者が協力するのです。順調に進む方が不思議です。

笠松:そうですね。しかし、正直な話、大きな問題になることはありませんでした。先ほどお話ししたパキスタンのプロジェクトでは多くの国から部隊が集まり、調整に難渋することがありました。それに比べると仙台空港でのプロジェクトで起きたことは何でもありません。

ただし、こんなことはありました。津波によって空港敷地内に流されてきた山となっているクルマの撤去作業をしていた時のことです。これらのクルマは破損しており、もう走ることのできない事実上のゴミです。このため米軍のある兵士がゴミとして取り扱おうとしました。それをコゼニスキー大佐が止めたのです。そして、「それぞれのクルマにはオーナーがいる。その気持ちを考えて取り扱うように」と指示しました。

また、あるチームが事前の調整をすることなく、ある小学校にヘリコプターで訪れ物資を配付したことがありました。困っている子供たちを早く助けたい一心で取った行動だったと思います。しかし、日本には日本の事情があります。被災した県の知事や、市町村の首長は、全体を見渡して、最も被害の大きいところから支援したい。そのためには、いろいろな調整が必要で、調整には時間がかかる。そういう配慮をする必要のない米軍から見ると、日本側の動きは遅く、「やる気があるのか」と思うところもあったと思います。

## 事実上の日米安保条約発動

トモダチ作戦は安全保障上も大きな意義を持っていますね。適切な部隊を選んで任務を与え、現地に急行させる。最後の“撃ち合い”こそないものの、それ以外は有事の部隊展開と同じです。「日米安全保障条約の事実上の発動」と言われました。米軍は1万6000人の人員のほか、約20隻の艦艇、約40機の航空機を動員しました。

笠松:おっしゃる通りです。米国の各部隊は極めて短期間で展開しました。

米揚陸艦「トートゥガ」が佐世保から北海道に急行。3月16日、苫小牧にいる陸上自衛隊第5旅団の人員約300人を青森県の大湊に運んだ。これは津波警報が出ている真っ只中での協力だった。

強襲揚陸艦「エセックス」はアジア諸国との関係強化のためマレーシアを訪問していた。しかし、3月11日夜には同地を出航し日本に向かった。同艦はこの後、気仙沼大島の港復旧作業に加わった。

米海軍のシンボルである空母もトモダチ作戦に加わった。3月13日にはロナルド・レーガンが到着し、洋上のハブ空港としての役割を果たした。厚木基地から空輸した援助物資を降ろし、ヘリコプターに積み替えて被災地に運んだ。

笠松:この機動力の高さは周辺の国々を驚かせたと思います。

国際政治の現実には厳しく油断のならないものです。ロシアは震災直後の3月17日、Su-27などの戦闘機を日本の間近まで飛ばし、放射能を収集する作業をしていました。中国も3月26日、海監のヘリコプターや航空機を海上自衛隊の護衛艦「いそゆき」に異常接近させました。

笠松:トモダチ作戦による一連の動きは、こうした国々に対して、日米の紐帯の強さ、日米同盟が非常に強固であることを周辺国に伝えるメッセージになったと思います。災害時の支援はもちろん人道支援の一環ですが、それにとどまらず、安全保障上の意義も持っています。以前は対テロ戦での協力がその役割を果していましたが、今は災害支援が取って代わっています。

## トモダチ作戦の基盤となった日米災害救護・復旧支援協力

笠松さんは 2013 年にフィリピンで台風被害が起きた時に日米が共同で行った支援を「第 2 のトモダチ作戦」と位置づけていますね。

笠松:おっしゃる通りです。実はトモダチ作戦は、それだけが独立して存在しているわけではありません。その基礎となる、日米間の様々な協力がそれまでにありました。そして、トモダチ作戦を踏まえて出来上がった新たな協力が今、育っているところです。

まず、トモダチ作戦の基礎となった協力からお話ししましょう。嚆矢となったのは、「日米防衛協力のための指針」（いわゆるガイドライン）が 1997 年に改訂されたことです。この時、「大規模災害の発生を受け、日米いずれかの政府又は両国政府が関係政府又は国際機関の要請に応じて緊急援助活動を行う場合には、日米両国政府は、必要に応じて緊密に協力する」という文言が加えられました。

具体的な協力の第一弾は、中米のホンジュラスが 1998 年にハリケーンに襲われた時に行った国際緊急援助活動です。自衛隊は被災民を援助するため、初めて国際緊急援助活動隊を派遣しました。これに伴い、太平洋をまたいで 1 万 2600 キロメートル先の同地まで援助隊の装備品を運ぶ必要がありました。輸送機 C-130 の航続距離は 4000 キロメートルなので、途中で幾度か燃料を補給しなければなりません。この時、米軍が基地を提供してくれたのです。グアムのアンダーセン空軍基地、ハワイのヒッカム空軍基地、カリフォルニアのトラビス空軍基地などで給油することができました。ここから、日米の協力が「間接的」ながら、始まったわけです。

その次は 2005 年にパキスタンで大地震が起きた時に行なった「パキスタン国際緊急援助活動」です。この地震で、7 万人の市民が亡くなりました。パキスタン軍はテロとの戦争の真っ最中であるにもかかわらず、相当の人員を救援・復旧活動に割かなければならない。しかし、それでは、対テロ戦の勢いをそいでしまうことになりかねません。それを避けるため、日米が協力して救援・復旧活動を支援しました。日米の協力が、対テロ戦の維持という政策で協調する「戦略的」な性格を帯びるようになったのです。

次のステップになったのは、2010 年に中米ハイチで起きた地震に対応した「ハイチ国際緊急援助活動」です。この時は、ハイチに居た 34 人の米国民を、ポルトプランス空港から米マイアミのホームステッド空軍基地まで自衛隊が輸送機 C-130 で運びました。また、腹膜炎と腰椎骨折で苦しむレオガン市在住の女の子を、米海兵隊の部隊がいる 3 キロ離れた地点まで、自衛隊が車両で運びました。ここからは海兵隊がヘリを使い、米軍の病院船「コンフォート」まで運んでいます。このプロジェクトでは日米がついに現場で「直接的」に協力する段階に達したのです。こうした積み重ねがあったからこそ、トモダチ作戦で協力することができたのです。

## フィリピンでの災害支援は第 2 のトモダチ作戦

トモダチ作戦が元となっている、その後の協力というのはどういうものですか。

笠松:一つは、「海図」の整備です。トモダチ作戦は「海図なき航海」と呼ばれていました。日米がどのような役割を分担するのかなど、事前には何も決まっていなかったからです。しかしトモダチ作戦を受けて、我々はこの「海図」を整備しました。その成果の一つが「自衛隊南海トラフ対処計画」です。南海トラフ地震が起きた場合を想定して、日米調整所の設置要領や、調整メカニズムの作り方、日米が共同して行う活動の概要をまとめています。

もう一つが、2013年にフィリピンを襲った台風への対処でした。レイテ島のタクロバンなどで洪水や土砂崩れが発生し、多数の死者や避難民が発生しました。トモダチ作戦を含むこれまでの活動で培った日米の協力体制を第三国に対して提供したのです。日米同盟がまさに「地域を安定させるための公共財」としての役割を果たしました。

この活動では三つの大きな進展がありました。一つは、日米間の情報共有がいっそう緊密になったことです。陸上自衛隊はこの年、米太平洋海兵隊司令部に常設の連絡将校を初めて配置しました。米太平洋海兵隊はフィリピンの救助活動を担当した部隊の上部組織です。

この時、同司令官のロブリング中将(当時)がこの連絡将校に作戦室に入ることを特別に許可しました。おかげで陸上自衛隊は、米軍がどのように動こうとしているか、すべての詳細情報を得ることができ、緊密な連携をすることができました。二つめは国際緊急援助活動において、日米物品役務相互提供協定(ACSA)を初めて適用したことです。ACSAは、自衛隊と米軍の間で、物品・役務(サービス)を相互に提供する枠組みを定めた協定です。防衛省は2012年に自衛隊法を改正し、国際緊急援助活動についても適用できることを明記しました。フィリピンにおいて、これを初めて実行することになったのです。

## 協力の輪を多国間に

三つめは、これまで培ってきた、日米以外の国とのヒューマンネットワークが花を咲かせたことです。実は、陸上自衛隊は2002年から、人道支援/災害救助活動などにおける多国間協力をテーマにしたアジア太平洋地域多国間協力プログラム(MACP)を開催しています。大規模災害が起きた時の多国間調整のあり方などについて議論を続けてきました。そして、この時、まさに13カ国からなる多国間調整所を設置することになりました。参加したのはフィリピンのほか、日米、オーストラリア、ニュージーランド、ブルネイ、インドネシア、マレーシア、韓国、英国、スペイン、カナダ、イスラエルの各国です。幸いなことに、多国間調整所に姿を現した日米、カナダ、フィリピン、英国のメンバーはMACPの参加者だったのです。MACPにおけるこれまでの議論の中で調整メカニズムのテンプレートを共有していたため、調整作業をスムーズに進めることができました。

中国の台頭を背景に、アジアで多国間安全保障体制を築くべきとの議論があります。災害対応を通じて築いた多国間調整のメカニズムが、有事の際に役に立つようになるかもしれないですね。

トモダチ作戦では、素早い動員が日米同盟の力を証明することになりました。フィリピンでの活動においても同様のことがあったのでしょうか。海上自衛隊の空母型護衛艦「いせ」に、米軍の垂直離着陸輸送機「オスプレイ」を搭載して臨んだと聞いています。

笠松:そうですね。これには現地を不安定な状態にしない効果が期待できました。

大きな災害が起き、現地政府の機能が麻痺すると、その空白を突こうとして、反政府勢力などが活動を活発化させることが想定されます。そうした事態を招かないよう、すぐ近くに日米が存在していることを示すシンボルというわけですね。

笠松:おっしゃる通りです。

人道支援/災害救助活動における日米の協力は、今後どのように発展させていくでしょうか。

笠松:大きく三つの方向に進化させていく考えです。一つは、第三国に対する能力構築支援です。2012年度以降、東ティモール、カンボジア、ベトナム、モンゴル、インドネシアに対して、人道支援/災害救助活動の能力を高めるための支援を提供しています。例えば東ティモールでは車両整備技術の教育を、カンボジアでは道路構築の教育を行ないました。

二つめは日米にオーストラリアを加えた3カ国間の協力を強化することです。2013年に陸上自衛隊と米太平洋陸軍、米太平洋海兵隊、豪陸軍のトップが集まり、「人道支援/災害救助活動」と「能力構築支援事業に関する情報共有」などについて協力していくことを盛り込んだ共同声明を発表しました。

三つめは、2010年に創設された拡大ASEAN国防相会議(ADMM+)における秩序作りに貢献することです。会議には五つのワーキンググループ(WG)があります。日本は2013年、防衛医学のWGでシンガポールとともに共同議長を務めました。この活動の中で、大規模災害が発生した時の防衛医学における各国の協力のあり方について検証するため、机上演習や実動演習を行いました。実動演習には18カ国から3100人が参加しました。さらに2014年からは、人道支援/災害救助活動のWGにおいて、ラオスと共同議長国を務めています。

ADMM+において日米は直接的な協力はしていませんが、ここでも日米が連携していくことが重要だと考えています。

傍白 「トモダチ作戦」——取りようによっては、偽善の響きを持つネーミングだ。国益のためには相手が誰であれ厳しい態度に出る米国が、単に友情で行動するわけがない。このように捉える向きは多いにちがいない。しかし、日米間に友情が全くなかったと考えるのも間違いだろう。笠松誠・西部方面総監部情報部長が披露してくれた教え子のエピソードからは、日本人と米国人が交流し語り合ってきた基盤があり、それがあったからこそ、被災者の心情に思いを馳せた行動を米兵が取ったことがうかがわれる。この友情に対して、心からお礼を申し上げたいと思う。

この友情を、日本はアジアの国々との間にさらに広げていくことを考えねばならない。そうすることが、危機に瀕した人たちの生命と生活を救うことはもちろん、国と国との関係を深めること、そして日本自身の安全保障の強化にもつながる。

最後にもう一つ、エピソードを紹介しよう。仙台空港のオペレーションから数カ月後経った2011年夏、コゼニスキー大佐は米国に帰国することになった。同大佐は笠松・西部方面総監部情報部長に「帰る前に、やりたいことがある」と語った。それは、民航機で仙台空港に降り立つこと。それが震災復興のシンボルだからだ。同大佐は、この夢を実現して米国へと去っていった。西山和宏

○西山さんこんにちは

メール 拝見 米国 友達作戦 ほんとに 親身になって 災害復興に協力していることがわかりました。

今後も、いろいろな面で 日米共同作戦が 必要となってくるように感じます。

安倍前総理大臣は確かに 悪化していた日米関係を立て直し、地球儀を俯瞰する外交は 評価できる面があるとしても(大目に見て…)今、ロシア、アジア近隣諸国との懸案の解決は進まないままで退任され、課題は残っています。

これから、日米協力関係が どのように進んでいくのか、反面 どのように進めるべきなのか？ 私には まったくわかりません。

将来、アメリカの五十番目の州として… また、中国の今の勢いでは 中国に占領されるかも？と言ったことも不安が横切ります。このように、感じているのは私だけ でしょうか？ 今の日本の菅政権運営含め、息子さん絡んでの総務省幹部の食事接待問題、NTT も同じ、今、コロナ ワクチンについても なんだか、もう一つ大丈夫か？という気持ちになります。

すみません、いろいろ 愚痴見合いなこと書いてしまいました。折角、あなたから 良い話のメール頂きながら失礼しました。

又、よろしく申し上げます。木場 祥雄

有訓無訓 折木 良一〔自衛隊 元統合幕僚長〕

西山コメント



自衛隊で統合幕僚長(編集部注:制服組のトップ)を務めていた時に東日本大震災が発生しました。指揮官として留意したのは、目の前で起きている事象と、手元にある部隊の能力を正確に評価し、組織をスムーズに動かすことでした。(写真=加藤 康) 地震・津波の対応には、陸上・海上・航空自衛隊から集めた部隊を一体的に運営する統合任務部隊を組織し、3者が無駄なく連携できる体制を敷きました。

救難物資の配付の一例を説明しましょう。まず海自の船で救難物資を仙台沖まで運ぶ。これを空自のヘリコプターで陸自の拠点まで運搬。陸自の隊員がそれぞれの避難所に送り届ける。統合部隊であれば、こうした任務を最短の時間と最少の要員で実現できます。さらに統合任務部隊の指揮官に、陸自で東北6県の責任者を務める君塚栄治総監(当時)を充てました。陸自は、ふだんから地元の自治体や住民と接点があり、人情にも通じている。現場を最もよく知る彼らに、現場のことを任せました。

統合任務部隊とすることで、トモダチ作戦を進める米軍との窓口を一元化することもできました。米軍が統合部隊を基本とするのに対し、自衛隊が陸海空に分かれていると、指揮が錯綜するなど混乱が生じかねません。一方、福島第1原子力発電所で発生した事故の対応には CRF(中央即応集団)を充て、東京にある統合幕僚監部と緊密な連携を取りつつ対応しました。原発の対応には政治の判断が大きく作用します。

電力会社との連携も欠かせないからです。地震・津波対応の現場を統合任務部隊に委ねた背景には、自衛隊が培ってきた、こんな考え方がありました——平時の組織管理は性悪説で、有事の実行は性善説で臨む。平時の訓練は高い目標を定め、それを達成すべく厳しく管理する必要があります。そうでないと、組織や人は安きに流れますから。

しかし、事が起きたら現場に任せる。あらゆる事態はすべて現場で起きているのです。現場でないと判断できないことがたくさんあります。現場できちんと動ける部隊を作るのが、平時における指揮官の仕事です。現場に出なくても、指揮官には指揮官の仕事があります。震災の時の私の仕事は、取り得る作戦を首相や防衛相に説明し、適切な命令を出してもらうことでした。

## 平時の管理は性悪説で

**有事の実行は性善説に立ち現場に任せる** 原発事故対応では、指揮官として二律背反の厳しい決断を迫られました。ヘリコプターを使った原発への放水です。日本国民ひいては日本という国を守るためには水をまかなければならない。あの程度の量の水をまいたところで意味があるのかと揶揄されましたが、あの時は、原発の暴走をとめるためにできることは何でもしなければならぬ状況でした。しかし、放水をすれば、隊員の命と健康を危険にさらす可能性があります。

結局、孤独の中で、放水を決めました。自衛隊員として国と国民を守るために生きてきたのですから。もし隊員に健康被害が生じた時には、その隊員と一生寄り添っていく覚悟をしました。一緒にヘリに乗っていければ、少しは心のジレンマを解消することができたかもしれません。けれども、それは指揮官の仕事ではないと自分に言い聞かせました。  
(談) =====西山 和宏=====

鉄という軍事力強化のための武器素材を求めて苦労があったことは興味深いです。日本武尊も砂鉄の産地探しで全国を歩いたと言われています。

出雲大社も砂鉄産地の関係があるのではないのでしょうか？

去る2月24日、米国のジョー・バイデン大統領が危機に際して、挙げた上位4カテゴリーは半導体、バッテリー、レア・アース、医薬品素材でした。

馬毛島、防衛省の説明、最近の政府のいろいろな説明からどのような説明がおおよそ推測がつく。「基本的に米軍は種子島上空を飛ばない経路を考えている」これでは後になって「…考えている」ことは本当であったが「飛ばない」とは言っていないと弁明するのでしょうか。

こんな説明をさせられるために訪れた防衛省の方々も大変だと思います。

○ 3月13日 大石コメント



継体天皇から今の天皇は始まり、大化の改新(天智天皇)から日本(倭から)の国の体制が確立した、というのがざっくりした今の古代史の大半の考えでしょうか？  
相変わらず「馬毛島問題」も新聞は取り上げていますが体制(国の考え)はひっくり返ることはないのでしょうか。

○いい天気になりました。

先ほどまでこの22日に就職のため上京する孫の壮行会を城山でやっていました。

ところで、明日の「永吉方面史跡を訪ねる旅」の資料をまとめてくれと大石くんより頼まれていましたが、

先日、本田さんから各人に送っていただいた資料がありますので、十分と思います。

森くんと永野さんには、他に永吉地区の史跡パンフレットも送られていると思いますので、それも持参ください。

それでは、明日お会いしましょう。 クマモト

○追記 その後、坊野地区の黒川洞穴と西郷屋敷と称されている女中「よし」の家などのいい資料が見つかりましたので、

3枚綴りの資料を3部作りました。明日お持ちします。 クマモト

○西郷屋敷の資料👉 よかった有難う御座いました^o^

明日はよか天気ですねー

楽しみにしています^o^

○3月16日 隈元コメント

昨日に続き「坊野地区史跡旅2回目」を今日アップしました。

仲間限定では無くてもいいのでは？ 大石くんに任せますよ。 クマモト

○西山コメント

お心遣い ありがとうございます。

読書の範囲が随分と広いですね  
感心しました。

取り寄せるべきアマゾンで手配しました

私は、本に傍線、書き込みをします。

今月、「私の履歴書」はホリプロの堀威夫でした。

ワゴン・マスターズとか守屋浩などのころが

書かれていました。



=====

西山 和宏

例によって、漢字、それもあまり見たことがないもので綴られていましたが  
繰り返しふられたルビに助けられて、先へどんどん読み進むことができました。

それにしても、詳細極まりない記述、どれほどの史料を読み込んでいるのかと

驚くばかりでした。もう2回読んでも、半分も覚えられないような気がしました。

でも断片的な知識を増やすことはできます。

国を守り、国を栄えさせるための貿易のために、知恵を絞り命をかけて奔走した人々の物語、スケールの大きなものでした。

1993年1月から大河ドラマで放映されたとは記憶にありませんがなんとなく、「うしゅがなしーめー」だけは耳に残っていました。

沖縄歌舞伎を観ようと誘われて、一度、琉球舞踊を観たことがあります。どうして沖縄にこんなに素晴らしいものがあるのか不思議でしたが、その答えが見つかりました。

折を見て、読み返したいと思っています。

薦めて戴いてありがとうございました。

## ○ 大石コメント

冊封とは何か？又、当時の中国東シナ海を望む福建省の都市の状況そして又沖縄舞踊の歴史などノンフィクション作家の面目躍如。

ストーリーもさることながら読み終えたらいい勉強になりました。

西山くんの本には多色蛍光ペンの跡がいっぱいなことでしょう。

(うしゅがなしーめー)が西山くんの残響ならばくは江戸時代の大奥を連想させる神女集団の長『聞得大君』が残ります。

ぼくの興味は琉球侵攻の薩摩島津家の総大将・樺山久高と副将・平田増宗の確執を作家がどう書いたかでしたが、も少ししてから『天地に燦たり』を再読したいと隆さんに貸した本を(ちょっと気が引けたけど)返してもらいました。

## ○西山コメント

確かに『天地に燦たり』と姉妹本のようなですね

私もいずれ読み返したいと思っています。

真鶴が妖艶な感じ

さて、平田増宗の暗殺について

原口虎雄は

明暦～漢文のころ(1655～72)までに、外城の分合・新設を射完了して家臣団の所替(所＝外城から別の所に移住させる)を断行して、在地的・同族的な紐帯を断ち切り中世的家臣団として再編成した。

もとの土地にとどまることを希望する者には、近世的な百姓化を徹底して門百姓におとした。

この兵農の分離は宝永から正徳のころ(1704～15)まで一部においておくれたようです。

平田増宗は、このような新体制に不満であったため、その他の前代以来の功臣とともに新体制転換のために暗殺されたと書いています。



○ <https://youtu.be/X3baR8srtFc>

上は日置坊野地区歴史旅のYouTube動画です。

クリックしたら見れると思います。



あまり冴えた印象の先生ではありませんでしたが鹿児島県考古学会会長まで務められたとは立派なものです。

同行した M くんは前記・川口貞徳氏が「川口」を「河口」に要修正。=====西山 和宏



### ○西山さん

川→河 ご指摘ありがとうございます。

私の悪い癖で、一回書いたものを見直すことがなからこういうことがよく起こります。

何かあったら、又教えてください。

昨日は最初計画していた先週の金曜日の天気予報が悪かったので事前に昨日にしたものです。

おかげで、晴天・温暖な日和に恵まれて楽しい一日でした。

今後、数回書く予定ですので、お待ちください。 クマモト

○皆様 小春日和の歴史散歩 いいですね～

もうすぐ 春本番 いつも配信 ありがとうございます。 長崎 諫早 森永

○3月17日

大石コメント

私たちが学生の頃から鶴丸城と呼ぶ島津氏の居城だった鹿児島城の発掘(調査)が進んでいる。

とりわけ昨年、『御楼門』が完成してからは西郷隆盛銅像と並んで鹿児島市の シンボルといえる。

私たちが小さいころ今の黎明館は天守閣のない鶴丸城の本丸と教えられてきたように思う。

「人をもって城となす」とか、言っていたような…?

その後、天守閣の代わりに城山があった、だから守るときは山に上がればいいのでわざわざ天守閣を作る必要はないんだ。…そんな認識でいたように思う。

今回、今日の新聞をじっくり読んで分かったことはこんなことでした。つまり…

--城山の展望台あたりに『本丸』があって、『大手口』は照国神社の左側に細く上がる道(学生の頃に近くには割烹やラブホテルなどがあった坂道)で、上った処が『城山二之丸』だった。

…ちょっと待てよ!!

それか、この図を見ると、城山に沿って新上橋方向に行く道(上之平通り)の端付近が『二之丸』かも知れません。否! 国道3号の上に『中之平通り』があるので…よく分からなくなりました。





「鹿児島城の御楼門と大手門～鶴丸城を楽しもう！～」

お申し込みいただいた皆様へ

この度は、「鹿児島城の御楼門と大手門～鶴丸城を楽しもう！～」にお申し込みいただき、誠にありがとうございます。当日ご視聴いただくにあたって必要な【視聴用 YouTube URL】及び、注意事項についてご連絡いたしますので、ご確認のほど、よろしくお願いいたします。

○大石コメント 22日 切抜・桐野作人シリーズ 出水筋⑱ 寺島宗則

11 文 化 2021年(令和3年)3月22日 月曜日 南 日 本 新 報



修復が済み、記念館として公開されている寺島宗則の旧宅  
＝阿久根市脇本

## 出水筋⑱

# 寺島宗則旧宅、記念館に

かごしま  
街道見聞記  
桐野作人  
[19]

阿久根市脇本に寺島宗則(1832～93年)の旧宅(松木家)がある。

寺島は幕末期は松木弘安と名乗り、蘭学と医学を学んだ。文久3(1863)年の薩英戦争では五代友厚とともに英国艦隊の捕虜となったが、慶応元(1865)年の英国使節・留学生の派遣

目として明治創業期の日本外交を主導した。ロシアとの千島樺太交換条約の締結、日朝修好条規の調印、アメリカとの条約改正交渉など数多い実績がある。それを可能にしたのは蘭、英、独、仏の各国語に堪能な語学の天才でもあったからだ。

一方、神奈川県知事時代には造幣機械購入、灯台建設、電燈敷設など、多くの事業を手がけた。とくに電信事業では、長崎―上海、長崎―ウラジオストク間の海底ケーブルの敷設によって、世界とつながる情報革命を実現したので、「電信長官」の

寺島の先祖は江戸時代初め、甕島に配流された公家の松木少将(中御門宗信)(1578～1628年)。その子の宗義が藩主・島津光久により鹿児島に召し出されて、松木少兵衛と名乗った。

それから数代のち、松木宗保(1786～1845)は長崎に出て蘭学を学んで医者となった。宗保は子どもに恵まれなかった。天保7(1836)年、弟で郷士の長野家に養子に出た長野祐照の二男・徳太郎(当時五歳)を養子に迎えた。これがのちの寺島である。

寺島の実家・長野家は海に面している松木家から200mほど北に離れた高台に現存し、現在「故伯爵寺島宗則翁誕生地」という木札が立っている。

一方、松木家の旧宅は養父宗保が建てたものである。

宗保は藩命で長崎に留学したり、藩主の島津斉興の奥医師となつて鹿児島や江戸を往復したりして、その関係で寺島も養父に同行することが多く、長じて、これまた長崎で蘭医としての修業をし、その後も幕末の激動のなか、京大坂に滞在することも多かった。そのため、寺島がこの旧家で過ごした期間は短いだろう。

いずれにせよ、幕末史や近代史に名を残した寺島の旧家が長く保存されることを望みたい。

――歴史作家  
――隔週月曜日に掲載

○西山コメント

明治維新には、薩摩から知的偉人が数多く出ていますが寺島宗則は、その代表的な1人でしょう。撮影戦争の時、英国の捕虜になったと言われていますが拿捕された天祐丸などから部下たちを下船させ、英国水兵が船内の物資略奪の後、放火された船からサッサと英国軍艦に乗り移った。

横浜に英国軍艦が帰投すると、五代才助が有する英国人の人脈が釈放のために動いてくれ松木弘安とともに軍艦から降りて自由になった。

そのころ、松木は英語を話せたという。五代は上海で汽船の買い付け、グラバーとの取引を行っていた。

○八期のみなさん！！こんにちは。

八期 NET・管理人＆編集人の大石です。

今月はあと3日ありますが、今月(47)号は10年前東北地方を襲った大津波・大地震そして福島原子力発電所の大惨事のメモリアル号となり、メインコメントター(八期 MC)の西山さんからの貴重な投稿がありました。

紙面もかなりの充実なのでこの辺で今月号は締めたいと思います。もう少しの辛抱で小さな旅も再開したいですね！！

